



TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特集 座談会「小中連携を考える」

巻頭エッセイ

狂言 = Human Comedy..... 野村萬斎 01

特集

座談会

..... 稲岡章代・柏木賀津子・兼重 昇・畑田 文・竹内 理 02

連載

英語教師のための基礎講座 協同学習を重視する授業における指導案の書き方... 松沢伸二 12

評価クリニック 文法テストが測っている文法力再考 根岸雅史 14

授業レポート 「わかる」授業づくりを目指して(3)

— 学習が役立つことを実感できる日々の表現活動 — 井上志帆 16

小学校英語 Just Now 米百俵のまちの外国語活動 杉山 敏 19

単語の文化的意味 73 new 森住 衛 21

Essay Japan's Best National Export: Entrance Ceremonies Robin Sakamoto 22

英語教師のリソース 基本文や語彙を文脈の中で理解できるチャンツ 宮下智恵美 23

AROUND THE WORLD フランス：ことばと文化 [1] 町田 健 表紙裏

表紙写真について ノルウェーのベルゲンにて 青柳有季 表紙裏

Vol.15

SUMMER 2009
SANSEIDO



歴史的多言語国家フランス

現代のフランスでは、新たに移民してきた者などを除いて、フランス語を満足に話すことのできない国民はほとんど存在しません。どんな辺境の村に行こうが、フランス語が通じるだろうかと心配する必要は、まずありません。

この点で、フランスは事実上の単一言語国家だと見なすことはできます。けれども歴史的に見ると、フランスという国は、その歴史を通じていくつもの言語が使われ続けてきた国なのです。ローマの支配下にあった時には、ほぼ全域でラテン語が使われていました。その後、フランスの南半分では、恐らく7世紀頃には、「オック語（またはプロバンス語）」と呼ばれる言語が、北部のフランス語とともに成立し、現在に至るまで使われ続けています。この言語は、フランス語に継ぐ有力な言語で、中世にはこの言語による華やかな文学作品が盛んに書かれました。現在日常的にオック語を使う人はあまりいませんが、オック語復興運動は継続的に行われています。

さらには、最南端のスペインとの国境地帯では、「カタルーニャ語」が、東部のアルザス・ロレーヌ地方では「アルザス語」が、西部のブルターニュ地方では「ブルトン語」が、北部のベルギーとの国境地帯ではゲルマン系の「フラマン語」が、そしてナポレオンの出身地コルシカ島では、イタリア語に近い「コルシカ語」が、大西洋岸のスペインとの国境にあるバスク地方では「バスク語」が、そしてスイスとの国境地域では「フランコ・プロバンス

語」が使用されています。

これらの言語は、フランスでは「地域語」と呼ばれているのですが、かつてのフランス政府は、これら地域語の公的な場面での使用を正式には認めていませんでした。しかし、1970年代以降は、地方分権の波にも押されて、地域語使用者の権利が認められるようになりました。初等教育で地域語の授業が行われたり、一部の言語については、大学入学資格試験（バカロレア）での科目として認定されるほどにもなったのです。

ただし、公用語はあくまでもフランス語ですから、フランス語を使った方が社会的に有利であることは間違いありません。情報や知識を伝える媒介となる言語も、ほとんどがフランス語です。地域語による放送も行われてはいますが、限定された範囲でしかありません。このため、オック語やアルザス語については復興運動が行われているものの、地域語の使用者が減少し続けているのが実情です。日本の方言と同じように、完全に消滅するということはないものの、地域におけるその勢力が減退するだろうことは予測できます。

そしてまた、世界語としての英語からの外来語は、その公的な媒体での使用に対する政府の施策にも関わらず、どんどんと増大し続けています。この流れを押しとどめることは困難です。かつての外交用語としてのフランス語そのものの威信も、危機にさらされています。

表紙写真
について

ノルウェーのベルゲンにて

青柳有季 Aoyagi Yuki (東京学芸大学附属小金井中学校)



かつてノルウェーの首都であり、北欧最大の港町だったベルゲン。現在人口は約25万人でフィヨルド観光の拠点として賑わっています。ハンザ商人による繁栄の時代を今に残すベルゲンのブリッゲン埠頭に來ると、タイムスリップしたような感覚に襲われます。

波止場沿いにはカラフルな木造建築が並んで並んでいます。これは中世ノルウェーを代表する細長い「ゴード」と呼ばれる建築で、切り妻屋根が特徴となっています。これはハンザ同盟時代に繁栄を極めたドイツ

商人によって建てられ、1702年の火災を経て修復、そしてブリッゲン地区は、1979年にユネスコの世界遺産に認定されました。今日ではカフェ、レストラン、民芸品店、クラフトショップ、工房として使用され、観光客に楽しまれています。そして、石畳の細い通り道、店のミシミシとなる黒い床、そして一部傾いている建物にも歴史を感じました。

ベルゲン港の広場には活気溢れる魚市場があります。そこには新鮮な魚介類から花や野菜などまで幅広く店が建ち並び、試食が気軽にできま

す。品切れの商品が続出していたある店の店員さんは、違う店から同じ商品を調達してもらっていました。ここにノルウェー人の明るく気さくな気質を垣間見た気がしました。

私がさっそく購入したのは、歯磨き粉のような真っ青なチューブに入っている「たらこペースト」です。そのチューブには、鰻を持って得意気に微笑む漁師の姿と三角屋根の「ゴード」が4軒描かれていて微笑ましく思えました。



狂言 = Human Comedy

野村 萬斎 Nomura Mansai

かつて、イギリスに留学した際、外国人に狂言を教えたり、説明したりする機会がありました。そこで、狂言の所作である「型」を教えたのですが、まず、「型」をどう英語に訳すかということから問題になってくるわけです。とりわけ、芸道や武道のようなものには、日本文化に根ざした共通概念があるようで、「型」にも、英語の form を超えたところにある「気」のような意味合いが含まれています。例えば、狂言の基本に、「腰を入れる」という姿勢があります。あごを引き、胸を張り、腰を引き、膝を少し曲げる、すなわち、体をくの字の連続に屈曲させていく中で、腰の骨盤を下に向けて、膝をかがめる姿勢です。それを教えるときに、日本人には、「ここで、こうやって『腰を入れて』と、慣用的な言い回しを使うことができるのですが、英語にはそのような言い回しはないし、直訳してもおかしくなる。そこでまず、「腰を入れる」ためには、「体に芯を持つことが重要になってくる」などと、イギリス人とディスカッションし、必要に応じて、concentrate on your center とか feel your gravity on your waist と、その背景にある意識などを補足することで、自然と膝を屈曲させ、腰を入れる姿勢を表現したわけです。すなわち、「腰を入れる」という日本語を英語に訳すのではなく、まず、その姿勢の本質を考え、それを英語で表現したのです。このように、日本人なら何となくわかるけれど外国人にはない感覚を教えることが、逆に、「型」とは何なのかについて、問い直すことにつながっていったのです。

こうした繰り返しは、ひいては狂言とは何かについて考えることになりました。そして、私は狂言の本質についてシンプルにしかもの確にイギリス人に説明する際、「人間讃歌の劇」という意味で、

human comedy ということばを使うようになりました。狂言には、「このあたりのものでござる」という出だしの象徴的なセリフにあるように、「自分は特別な存在ではなく、(お客様も含めて) 私たちは、時代も場所もここで共有していますよ」という精神が宿っています。その上で、太郎冠者などの登場人物が、誰もが持つ欲望の代弁者となってくれます。人間は本来、欲望を理性によってコントロールしているのですが、太郎冠者は、欲望に従順で主人公がダメだと言ったお酒を、飲みたいと思ったら飲んでしまいます。しかもそれが、ほとんど最終的に失敗に終わり、怒られたりするので、見る方はカタルシスを感じるのでしょうか。狂言を「滑稽な演劇」というと、演じることが滑稽であるように思いがちです。しかしながら、狂言とは、実は「人間とは滑稽な存在であることを見せる演劇」なのです。自分の欲求、欲望に素直に一所懸命生きている人間ほど滑稽に見えるということを一所懸命に演じて、滑稽に見えるようにしているのです。それを否定的にではなく、肯定的に捉えたのが、human comedy ということばでした。

狂言を当たり前のことのように子どものころからやってきて、さまざまな人たちと関わるうちに、その本質や普遍性について気付いてきたと言えるでしょう。

のむら まんさい

1966年生。狂言師。東京芸術大学音楽学部卒業。「狂言ござる乃座」主宰。国内外の狂言・能公演はもとより、現代劇や映画の主演、古典の技法を駆使した作品の演出等幅広く活躍。94年に文化庁芸術家在外研修制度により渡英。世田谷パブリックシアター芸術監督。

特集：座談会

稲岡章代	柏木賀津子	兼重 昇	畑田 文	竹内 理《司会》
				
INAOKA FUMIYO (兵庫県姫路市立豊富中学校)	KASHIWAGI KAZUKO (奈良市教育委員会)	KANESHIGE NOBORU (鳴門教育大学)	HATADA AYA (大阪府箕面市立西小学校)	TAKEUCHI OSAMU (関西大学)

小中連携を考える

竹内 平成23年度から小学校に外国語活動が本格的に導入されます。また、市町村によっては平成21年度から前倒しでカリキュラムが実施されるところもあります。外国語活動を体験してきた子どもたちが入ってくる時、中学

校の英語教育はどのようになるのかということも考えつつ、スムーズに子どもたちが小学校から中学校へ移っていけるように、小中連携について話し合っていきたいというのがこの座談会の主旨です。小学校では『英語ノート』が入

り、電子黒板で授業ができるようになるなど取り組みは進んでいますが、この状況は中学校では意外と知られていません。本日の座談会でそのような情報も共有し、今後の中学校の英語教育のあり方についても考えていければ幸いです。

小学校外国語活動の現状と成果

竹内 では最初に、それぞれの地域の小学校外国語活動の現状と、『英語ノート』やICT教材などの利用形態を教えてください。

柏木 3年前までは、奈良市全体としての小学校英語活動はあまりやってこなかったのですが、2010年に世界歴史都市会議が奈良市で開催されることも視野に入れ、「子どもたちに日本のことを発信できるような英語力を」ということで、2年前から「ハローイングリッシュ」が始まりました。外国人を含む、英語が堪能な地域の方に英語アシスタントとしてご協力いただいてスタートしたのですが、地域に密着した英語活動ということもあって、英語アシスタントの方が力を発揮されました。そして担任

の先生も、「こんなに子どもが学ぶのならやってみよう」と一緒に授業をされるようになりました。英語アシスタントはインプットの授業が上手でし、担任の先生はインタラクションのある授業が上手なので、役割を分担しながら進めていっています。

この2年間で子どもたちが驚くほど力をつけた学校もありますが、模索中のところもありますので、教員研修や訪問研修を各学校で行っています。また、英語活動が進むにつれ、やはり小中の連携が必要だという声もありましたので、市で推進室を作り、小・中・高・大の教員に集まっていただき、連携の柱について話し合っています。『英語ノート』については、昨年以下、各学校で指導案を作っても

らったり、市教委で活用資料を作ったりしています。そこにも奈良らしさを入れ、「奈良らしい英語活動」ができるよう工夫しています。

ICT教材は、英語アシスタントの英語に触れられるので、特に必要ないようなのですが、担任の先生が一人で授業をするときに活用したという声を聞いています。

竹内 地域人材の活用に取り組まれていること、担任の先生がうまく入りつつあることがわかりました。小中連携にも必然性が出てきているんですね。

柏木 中学校の先生も、子どもたちがどういう勉強をして入ってくるのかということに興味を持っていらっしゃるようです。

竹内 さて、次は箕面市立西小

学校の取り組みと、箕面市の状況を教えていただければと思います。

畑田 西小学校での英語活動は1999年から始まりました。私は2003年からJTEとして小学校に入り、担任とTTを行っています。

最初は、何から手をつければいいのかわかりませんでしたが、英語学習というより、コミュニケーションや異文化理解に焦点を当てると、国の方針を理解できてから、あいさつ、自己紹介などからカリキュラムを作っていました。取り組むにつれ、中学校では十分に時間を割けなかった数字や建物、国名などをゲームで取り入れても、子どもたちがおもしろいほど吸収するのを目の当たりにすることができ、英語活動の可能性を感じることも多々ありました。

『英語ノート』は、自分で作成したカリキュラムに合わせて適宜使っています。ただ、『英語ノート』にのみ頼り切って児童の実態に応じた工夫をしなければ、コミュニケーションの楽しさを味わわせることができないのではと、個人的には少し懸念しています。

箕面市全体では、英語活動を3年生から実施しており、ALTも週に2回派遣されています。教員研修として、指導案を作成したりもしてきました。今年度は意見交流もでき、取り組みが形になりつつあります。ただ、全体のものになっていないのが課題です。

竹内 箕面市は異文化理解から英語活動につなげていったということですね。可能性は大いにあるが課題もあるということでしょうか。

奈良市の英語活動の場合は、英会話型でしょうか。異文化理解型でしょうか。

柏木 内容は異文化理解型ですが、奈良や外国のことを扱いながらも、コミュニケーションの力をつけることを目指しています。

竹内 「コミュニケーション能力の素地」の育成に力を入れられているわけですね。それでは、姫路市の状況はどうでしょうか。

稲岡 姫路市は外国語活動の準備段階のまっただ中で、最近小中一貫教育標準カリキュラムが出来上がりました。拠点校、研究会もありますが、市全体としての教員研修はそう多くは行われていません。私の知る範囲では、それぞれの学校や担任の先生によって取り組み方は違っているようです。しかし、「いろんなことを知りたい」と授業を見に来られる小学校の先生からは大いに意欲が感じられ、それが子どもたちにも伝わるのではと期待しています。

今後、市内の全小中学校において小中一貫教育が行われるようになっていきます。全教科での小中連携が必要であり、連携を軸とした教育改革が行われていくと思われれます。

ALTは、小学校には希望により数週間に1回の割合で派遣されますが、小学校でどんなことをしたらよいかを、中学校の先生に尋ねたりしながら授業を行っている状況も見られます。地域人材を活用している小学校もあります。

竹内 今が入り口で、組織的にこれから取り組もうとされているのですね。取り組み状況も学校に

よって違うということでした。小中一貫教育になるというのは今の動きですね。英語教育にとっても追い風になるのではないかと思います。

さてそれでは、全国的な動きをうかがいたいと思います。

兼重 地域・行政区によって、また学校によってだいぶ取り組み方が違うのが現状です。

地方では、ALTと一緒に活動できる機会が多いのですが、都市部ではALTの人数が足りないので、ICT教材の活用が望まれています。

また、先ほど地域人材の話がありました。担任の先生やALTがうまく授業を進められるようにサポートする役割、バックアップするコミュニケーター的役割として、地域人材をとてうまく活用している地域もあります。地域人材に望まれる資質とはどのようなものかということは、ポイントになると思います。

『英語ノート』については、カリキュラム自体は拠点校を参考に作られたという経緯があるのですが、拠点校ではこれまでの活動にどう『英語ノート』を合わせていくかと

PROFILE



稲岡 章代

兵庫県姫路市立豊富中学校教諭。優れた授業実践によって2000年度バーマー賞を受賞。生徒の表現力を伸ばすための様々な工夫を積み重ねている。授業の様子は2003年11月NHK教育テレビ「わくわく授業」でも紹介された。2006年度兵庫県優秀教職員表彰を受賞。

INOAKA
FUMIYOKASHIWAGI
KAZUKOKANESHIGE
NOBORUHATADA
AYATAKEUCHI
OSAMU

ということが課題となると思います。また、拠点校以外の学校はレファレンスとして使えるだろうというイメージを持っているようです。『英語ノート』以外のテキストを使っている学校もありますが、いずれにしてもどう地域と結びつけていくかがポイントになると思います。

全国的な傾向としては、ALT任せではなく、担任の先生が一生懸命取り組んでいることが、この1年の大きな変化かなと思います。

竹内 地域人材の活用法は、一緒に授業をする役割、サポーター的役割など様々ですね。全国的には担任の先生が中心となって進めてきている、というのが小学校の現状と理解いたしました。

さて、小学校の現状がわかったところで、中学校側から見た小学校外国語活動の成果や影響を教えてくださいたいと思います。

稲岡 一番に、生徒が英語を使う割合が多くなってきたと思います。例えば、子どもたちに“Hello.”とあいさつすると、以前はにっこりするくらいでしたが、今は“Hello.”と返ってくるようになりました。また、英語を聞くとときも「こ

の人は何を言っているのかな」と、わくわくしながら想像することでもでき始めているのではないかと思います。相手の目を見てちゃんと話をするなど「相手を意識する気持ち」が持てているのかなと思います。これは、ことばを使う上でとても大切なことです。

心配しなくても、子どもたちはちゃんと世界に目を向けて中学校に入ってきています。そのような「素地」を持って入ってくる子どもたちを、中学入学と同時に「書くこと」だけに焦点を当てた評価などで縛りすぎないことが、小中で連携をする上で重要になるのだと思っています。

竹内 「コミュニケーション能力の素地」という点ではかなり改善が見られたというご感想ですが、教育委員会の立場で、いろいろな学校を見られていていかがですか。

柏木 5年目を迎える小中一貫校に行くと、9年生はALTと自然な会話ができるようになっていました。その子どもたちは、「外国の人に道を聞かれたら助けてあげる」と言うんです。それは相手を助けてあげられる自信があるということ

なんです。英語をスポンジのように吸収し、文法などを楽しく学び、習ったものから使っていきたいという子どもたちの態度に先生方も驚いています。

竹内 外国人に話しかけられても「逃げない」という目標は達成されたわけですね。さらに自分から助けようという意欲まで出ている。

柏木 小中一貫校では文字の導入までに100時間以上、英語の音に触れています。あまり英語が得意でない子どもも、たくさんの“example”に触れてきているので、難しく感じるような文でも、自分がかつて聞いたり発したりした例に戻って考えるようで、語順を間違えることは少ないようです。

また、子どもたちはゲームが大好きですが、高学年ほど「やりとり」している中味の方にも興味を持っていることが、英語活動のアンケートでわかりました。友だちのこと、外国のことについての関心が高くなってきている、これを何とか中学校に伝えて引き継ぎたいと思います。

小学校外国語活動と中学校英語の違い

竹内 小学校の状況がわかってきたところで、そもそも小学校と中学校の英語では何が違うのかということを考えてみようかと思えます。どんなところが大きく違うと思われるでしょうか。

兼重 小中の授業スタイルはもちろん違いますが、一番違うのは授業を作るときの根本的なイメージだと思います。小学校はトピック

や場面がまず設定され、そのあとで表現がついてきますが、中学校は教科書があるので、表現にまず焦点が当たり、そこから授業を作っていく傾向があります。

語彙についても、『英語ノート』で何語扱っているかが話題になりましたが、そこからいくらかでも広がってよいという、オープンエンドなイメージがあるのが小学校で

す。中学校でも新学習指導要領になると、広がりが出てくるだろうとは思いますが、現状では範囲がある程度決まっています。そういったところが違うと思います。

竹内 小中両方で教えられた経験のある畑田先生はどうですか。

畑田 子どもたちの興味・関心に基づいて自由に組み立てたり、他教科や「総合的な学習の時間」と

オーバーラップさせたりと、教師によって自由に広げることが可能なのが小学校の特徴だと思います。

中学校は基本的に教科書を終えないといけないので、その中で活動を織り込んでいくというのが根本的に違うところだと思います。

竹内 教科の枠を飛び超えられる自由さ、そのあたりも小学校の英語の特徴ですね。

稲岡 そうだと思います。題材で

いろいろな教科の内容を扱ってみようというとき、中学校ならその教科の先生に既習事項を尋ねなければなりません、小学校だと担任の先生が各教科の学習内容も把握されているので、既習内容とタイアップしやすく、子どもたちも理解しやすいと思います。

竹内 授業スタイルの大きな違いが小学校と中学校の間に存在していることがわかりました。「総合的な学習の時間」で食文化を学習し

たあと、産地について英語で表現したり、「歴史」で学んだことを英語のクイズにしたりと、柔軟に考えられるのは小学校のよさですね。別の教科で学んだ内容を英語でも言ってみたりできるということです。一方、中学校では各教科の専科の先生が指導するので教科枠は超えにくいのですが、意識的・分析的に学ぶことができます。そういった面でも確かにアプローチは違うだろうと思われます。

小中連携の意義とポイント

竹内 これからの義務教育は、9年間を通して子どもたちをどう育てていくのか、という目標を考える必要があると言われています。6・3で分けるのは大人の論理であり、子どもは一人の人間として成長していくわけですから、義務教育の9年が経ったらどんな子どもに育つのかを考えることはとても重要であると思います。

これは全教科に関わることで、英語においても中学校の新学習指導要領に小学校の外国語活動を踏まえることが明記されています。さらに、高等学校の新学習指導要領案にも中学校との接続について明記されています。つまり、小中に加え、高までもが連携する状況が目前にあるわけです。

そういった状況から「小中連携は必要だ」という前提にたって、小中連携の意義や、どのように進めたらよいのか、といったことをお聞かせいただければと思います。

稲岡 中学校側からいうと、小学校で何を身につけてきているか、また、集団としてどう伸ばすこと

が課題なのかということを見極めることが大切です。中学校ではスキル面を伸ばす必要もあるので、小学校でどのような「素地」が身についたかを、授業中の活動を通して自分たちの目で判断し、どういう形で迫っていくかと考える必要があります。

また、小学校で何がうまくいって、何がうまくいかなかったかを小学校の先生とお話することができれば心強いと思います。中学校の目標を達成するために、そのアドバイスをプラスとして取り込んでいくことが大切だと思います。

兼重 同じコンセプトを持って進めていくためには、お互いを知らなくてはいけないと思います。

例えば、小学校の最後のレッスンに中学校の先生が入るとか、卒業前の2月頃に中学校の先生とインタビューをし合うとか、同じ中学校区の他の小学校とのテレビ会議に中学校の先生も参加するとかいったことで、スキル面で何ができているのかを感じることができ

ます。小中それぞれの場所で最大限に働けるのは、それぞれの先生だと思うので、小中連携を効果的に行うために情報交換は不可欠だと思います。

竹内 連携をしっかりし、お互いを知り合うことが大切ということですね。

実際の指導で一番悩むのは、中学校入学時、つまり入門期の指導だと思います。小学校で何を学んできているのか、どれくらい定着しているのかと悩むところですが、例えば、文字や音声の指導は、どうしていけばよいでしょうか。

PROFILE



柏木賀津子

奈良市教育委員会指導主事。ハローイングリッシュ事業、奈良市小中一貫教育推進、小学校英語訪問研修などを通して、担任の先生のよさを活かす小学校英語活動に取り組んでいる。また、子どもの第二言語習得の認知学習についても研究を進めている。



INAOKA
FUMIYO



KASHIWAGI
KAZUKO



KANESHIGE
NOBORU



HATADA
AYA



TAKEUCHI
OSAMU



畑田 『英語ノート』を見ています、チャンツがたくさん扱われています。これを活用すれば、比較的抵抗なく音声から文法事項に入れると思います。また、曜日や月なども音声で慣れ親しんでいるので、それをうまく活用すれば、文字にも抵抗なく移行できるのではないかと思います。

文字に関していえば、小学校でも文字を書きたいという子どもの欲求はありますが、そこであまり文字指導をしすぎるのは望ましくありません。[ここから先は中学校でのお楽しみ!]>と期待を高めることも小学校サイドとしては配慮すべきだと思います。

竹内 小学校で身につけたことをよく把握し、それをうまく中学校側につなぐ工夫が必要なことと、中学校での「楽しみ」まで、小学校側がとらないという配慮が必要とのご指摘をいただきました。奈良市ではどうでしょうか。

柏木 奈良市では、入門期について、まず次の4つの連携を考えています。

①学習習慣：外国語活動で身につけた、ペアワーク、グループワーク、インタビュー、情報収集活動などの学習習慣を中1につなぐこと。

②指導法：「聞く」「話す」中心で学

習してきたので、中学校でも聞くことから指導したり、スピーキング活動などの言語活動を連携させること。

③発音と綴り：小学校では、外来語と英語で音が違うということに気づかせ、中学校では発音と綴りの関係を理論的に教えること。

④言語・文化：「外国語活動」ということなので、英語は世界の言語の中の1つというとならえ方をし、そのグローバルな視点を受け継ぐこと。

特に④については、話題に興味を持たせることが大事です。推進室では、中学校の先生と小学校の先生で題材が似ているページを見合って、授業のデモンストレーションをしたりしています。

また、文法の指導についても、どういう場面でその文が使えるかを、人との関わりや体の動きと一緒に指導できるとよいと思います。

竹内 指導法を連携させるということは、評価法もある程度連携させていくことになると思いますが、そのあたりはどうお考えですか。

稲岡 小学校と中学校では、目標が違う分、評価の観点が違うと思います。小学校では体験を通して理解を深め、積極的に取り組むことが大切になっていくと思いますが、中学校ではさらに、いろいろ

な活動や方法で「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」などのコミュニケーション能力についても評価していきます。

竹内 現在は、中学校ではペーパーテストが中心ですが、これは変わると考えられますか。

稲岡 ペーパーテストによる評価は、引き続き行われると思いますが、適した評価をするため、テスト問題の改善や工夫が重要になってくると思います。小学校で培われた音声面での理解が中学校でどのように伸びたかをみる問題、「読むこと」による理解度をみる問題や、英語のルールや文化に関する「言語や文化についての知識・理解」をみる問題、また、自分の考えや気持ちなどを英文で表現する「書くこと」の評価ができる問題などを一層工夫する必要性が出てくると思います。また、小学校で「聞く」「話す」中心に学習してきたことが単に「書けたらいい」ではなく、それらを活用してどうコミュニケーションを進められるか、ということの評価できるテスト問題がますます求められると思います。コミュニケーションを意識した評価の仕方を考えていかなければいけないと思います。

竹内 「文が作れたらよい」で終わらせるのではなく、その先のコミュニケーションをどう評価するのがポイントになりますね。

奈良市の方では評価についてはどうお考えでしょうか。

柏木 奈良市では今、小学校の評価規準を作成し、共通理解を図っています。評価の観点は、小学校でも使えるような中学校のそ

ピーキングの活動を参考に作成しています。

『小学校外国語活動 研修ガイドブック』には、どのようにがんばっていたか、また、子どもの変化を見ることが大事ということが書かれていましたが、どんな方法で評価するか、また、中学校にどう伝えていくかということを考えていかなければならないと思います。

竹内 実際にやってみるパフォーマンス・テストが重要になりますね。中学校でも導入の必要性が出るでしょう。もし中学校でそういった評価法を導入しなければ、コミュニケーションは重要でないというメッセージを送っているのと同じになりますので、このあたりも運動する必要がありますね。

兼重 連携を考えるならば、何ができて、何ができていないのかという評価はした方がいいと思うので、パフォーマンス・テストを設定して評価することは、小学校でも中学校でも求められると思います。

中学校の先生が小学校に入ってきてインタビューをするというのは、小中連携を考える上で、とても勉強になると思います。以前、子どもたちにインタビューテストをしたことがあるのですが、何ができて何ができないのか、また、場面によって何ができるのかがよくわかりました。それを文書で伝えていくのは難しいので、次年度の中1を担当するであろう先生が小学校にやってきて、グループに分かれてインタビューやパフォーマンス・テストで評価することで、文書では伝わらない情

報交換が可能になるのではないかと思います。

かつて、中学校から小学校を見たとき、一見何をしているのかかわりませんでした。しかし、それは評価方法やねらいも含め、向いているベクトルが小学校と中学校では違うからだと思います。そういった意味でも、知的活動のより発展的なもの、何かを分析的に考える楽しさというのは、中学校に残しておいてあげるというのは大切なことだと思います。

もう一点、社会的な観点から小中連携を考えると、情報発信が重要になると思います。これまで、入門期は少しずつステップアップするイメージだったと思いますが、小学校に外国語活動が入ること、言語材料の提示の方法が変えられるかもしれません。しかし、教科書を最初からきちんとやらないと保護者が不安に感じることもあるので、そうさせないために、情報発信が必要かと思います。

竹内 指導法・評価に関して、いろいろご意見をいただきました。測定・評価には、点数化して生徒の能力を測る psychometric と、どれだけ定着したのか、指導法はどうだったのかなど、教育的効果を測る edumetric の2通りがあります。小中連携においては、児童・生徒の能力だけを見るのではなく、定着度や指導法の改善にもつなげていかなければいけないので、教師の方にもベクトルが向いた edumetric をしていかなければならないのではないかと感じます。

いずれにせよ、指導も評価も9年一貫といっているのですから、

行政や学校はその方針を社会に向けて説明し、実行していく必要がありますね。

柏木 日本の子どもたちが最初に英語に接する約500時間を小中が担うことになるわけですが、小中連携を考えると、そこだけを考えるのではなく、その子どもたちが20歳になったときにどういう役割を国際社会の中で果たしていくのかを考え、そこをぶれないベクトルを小・中学校では持ちたいと考えています。

そういう意味では、高校の英語教育もひと続きではないかと思えます。小学校で最高のスタートを切ったとしても、それを中高とつなげていくためには、行政はもちろん、指導者も一本化しないと実現は難しいと思います。

竹内 やはりもっと大きなスパンで英語教育を見ないといけないということですね。

柏木 しかし、それをどうやって保護者に伝えるか、どうやって小学校と中学校の先生で共有するか。今あるものをつなぐのは連携ですが、今あるものを練って新しいものを作るのは一貫で、これは

PROFILE

**兼重 昇**

鳴門教育大学准教授、小学校英語教育センター兼務。同センター事業により「お遍路型研修」を全国で実施。「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」(文部科学省)の作成協力者。著書に「小学校 新学習指導要領の展開 外国語活動編」(明治図書出版)ほか。

INOAKA
FUMIYOKASHIWAGI
KAZUKOKANESHIGE
NOBORUHATADA
AYATAKEUCHI
OSAMU

大変です。一教員、一小中学校ではできないので、もっと大きな機関が、日本として何を指すかということを出さないといけないと思います。小学校の先生はいいポイントをつかんでいっちゃ

中学校の指導は変わるか

竹内 では、小学校に外国語活動が入ったことにより、中学校の英語教育はとなるとお考えでしょうか。

畑田 生徒が小学校ですでに学んできたことは何かということや日々の指導で意識し、もう一度丁寧に押さえるべきことと、さらにと進められることを区別し、メリハリをつけた指導ができるようになると思います。

また、小学校では「聞く」「話す」といった活動中心で展開するので、そういった態度は育ちつつあることを前提に、それを活かした授業を構築していくことができると思います。

2002年に「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想が策定されましたが、どの程度の英語力を目標にするのかといった問題は、言語政策レベルの極めて難しい話です。今言えるのは、少なくとも自分が中学校で教鞭をとっていた時代のままではいけないということです。中学校も高校も、変わる、変わらないではなく、変わっていかないといけないということを痛切に感じています。

稲岡 変えやすい状況にはなっていくと思います。私たちは、まだ小中連携の経験が浅いので不安もありますが、きっとこうしたらど

いますが、それを説明する責任を小学校だけに任せるべきではないと思っています。

竹内 言語政策ですね。日本の弱いところですよ。学習指導要領を通して方針を示してはいるけれど、

うかということは見えてくると思います。例えば授業で、今までなら文型練習であくせくし、テストが近づけば焦ってどんどん教科書を進めていたとしても、小学校の外国語活動で一度は触れていることであれば、オーラルで文型をもう一度思い出させ、さらに関連表現の文を使って大いに表現力を伸ばしたりすることもできると思います。

例えば、小6の「夢を語る」場面でI want to be...の表現を練習したとしましょう。中1の自己紹介では、今までなら名前や誕生日などの表現を教えて自己表現をさせていましたが、今後は小学校で学んだ表現も自由にふんだんに取り入れさせることができます。さらに、中2の教科書で不定詞が出てきたとき、toの使い方について、改めて理論的に文法的な説明をしてあげられます。あわせて、「小学校ではこう思っていたけど、今はこれになりたい」という表現をさせ、because...で理由を述べさせたり、What do you think about my dream?と意見を求めさせたりすると、表現を深めたり意見の交流をしたりすることができます。中学校は友だちの手助けをしたい、人のために役に立ちたい、人から求められる人間にな

現場がそれをなかなか読み取れず、混乱が生じている側面もあります。一定の方向を、皆がわかるよう明確に打ち出し、ぶれずに、それをしっかりと発展させていかねばいけませんね。

りたいという思いがいつそう芽生えてくる時期でもあります。状況しだいで、自分を見つめ、自分に自信をつけ、友だちと支え合うということがどんどんできるわけです。題材の扱い方しだいで、自分と対話をするチャンスにすることができます。

竹内 小学校で学んできたことをうまくリサイクルして拡張する一連の流れが必要だということですね。習ってきたことをしっかり押さえて、もう一步踏みこんでみる、もう一言付け加えて活動を発展させる、といった指導が必要なかもしれません。

兼重 今、稲岡先生がおっしゃった「表現を深める」というのがポイントかと思います。小学校ではことばと本当に言いたいこととのギャップが問題になりますが、中学校では理由も英語で言うことができ、表現を深められるのがよさであると思います。時間数も中学校では週4時間に増えるので、どう深めていくか、広げていくか、知的好奇心をどういうふうに刺激し、自分の言いたいことを表現していくか、などといったように、ことばと言いたいこととのギャップを埋めていくことが、生涯教育としての英語教育のあり方だと思います。

竹内 深めていく、発展させていくということが中学校英語の醍醐味なのですね。

これに関連して、例えば、子どもたちに自分が変化したことを意識させるため、小学校の英語学習記録を中学校にも引き継いでいけるポートフォリオのようなシステムがあるとよいですね。音声でも簡単に記録を残せる時代ですから。そういう継続的評価、一種のカルテのようなものが中学校の英語の先生に届けられるシステムを国として構築していかなければならないでしょう。EUには、どんな言語を、どういうふうに学んで、何ができるようになったかを記録する言語ポートフォリオがあります。そういった「一貫した指導」の手助けになるようなツールを確立していかなければなりませんね。

柏木 ポートフォリオとまではいきませんが、I learned... と心に残ったことを授業の終わりに言う場面をためていくとおもしろいかもかもしれません。また、ビデオ観察で小学校と中学校を記録し、自分の成長を見るのもおもしろいと思います。

竹内 では、小学校の成果を引き継げなくなるので、中学校ではこれを絶対にやってほしくない、というようなことはありますか。

畑田 例えば、子どもたちは小学校でいろいろな単語に触れます。きっと知っていることは言いたがると思うのですが、中学校でそれを制限することはしないしてほしいと思います。

竹内 うまく受けとめてあげないといけないということですね。

稲岡 それはある意味、教師の人間性・資質に関わる問題ですね。

加えて、小学校の外国語活動を否定するような発言、例えば「発音が違う」「そんなことを習ったの?」といった発言は、お互いに1つの目標に向かっていているわけですから、マナーとしてやめた方がいいですね。

また、思い切り書くという体験なしに、最初から型にはめると、自由な発想がつぶされるので、おもしろみや楽しさがなくなってしまうし、自由な発言や発想がしにくくなると思います。授業や評価で小学校と一貫性を持たせることが必要です。

それから、いくつかの小学校から1つの中学校に入学してくる場合が多いのですが、「いろいろなところから子どもたちが集まってきた楽しい」と考えたいものです。「学校によって差がある」とマイナス的にとらえることはよくありません。子どもも保護者も不安になり、その地域ではいい教育がなされないと思います。

兼重 中学校は、正確さを求めたりしなくてはならない立場だと思いますが、小学校の否定をするのはよくないですね。特に発音のことはよく言われますが、子どもの発音を聞かずにそういうことを言われる場合もあります。その意味でも積極的に情報をとらえることが必要なのかなと思います。

竹内 では、これを中学校ではぜひやってほしい、ということはあるですか。

柏木 子どもはわからない単語や知らない音声形式でも、うまく音

と意味を結んでいることがあります。そういった小学校での学びを活かし、豊かなインプットの中で規則を確認していく指導があるといいと思います。また、小学校と同じ表現を繰り返すときも、「似ている」から自信を持って取り組み、違う方法で学べるから新鮮だと考えてもらえたらと思います。

稲岡 確かに、小学校での音声中心の学びが基礎的な力となって、書く力に影響を与えます。しかし、音声だと得意ではないし、おもしろみがわからないけれど、書くのは好きだし、書くことで上手に自分の考えを表すことができる生徒もいるので、中学校ではそういう生徒にも自信をつけさせるようにしたいですね。

兼重 どんどん表現してみようという小学校外国語活動のコミュニケーションのスタイルと、正確さを求める中学校英語のスタイルがありますが、バランスをうまくとらないと、子どもたちがしんどくなってしまうと思います。中学校の先生は子どもたちを見て、調整していかないといけない。キーワードは「メリハリ」だと思います。

PROFILE



畑田 文

大阪府箕面市立西小学校教諭。箕面市内中学校、教育委員会勤務を経て、2003年より現職。「小学校英語 学級担任のための活動アイデア集 3・4年生用／5・6年生用」(三省堂)、「小・中学校の英語遊びシリーズ」(明治図書、長瀬莊一編)等の執筆に参加。

INOAKA
FUMIYOKASHIWAGI
KAZUKOKANESHIGE
NOBORUHATADA
AYATAKEUCHI
OSAMU

竹内 小学校は音声中心だから、中学校ではがんばって書かせない

小中連携の課題

竹内 次に、小中連携の課題をお聞きしたいと思います。おそらく、連携をしていく上で克服しなければいけない問題は山積していると思います。一番よく言われる問題は小学校と中学校の格差、つまり「小小格差」ですが、どうやって足並みをそろえていったらよいのか頭が痛いところです。また、早い時期からの「英語嫌い」出現も、克服しなければいけない課題です。

柏木 「小小格差」の問題を抱えるのは英語ではありません。奈良市では、教員研修を行うときに中学校の学区別で小学校の先生に集ってもらい、時間数や内容などの情報交換をしてもらっています。将来的には、そこに中学校の先生にも参加してもらえるとよいと思っています。

また、『英語ノート』を見ているとインプットから発信活動へという流れになっていますが、インプットが十分でないのに発信をがん

といけないと考える先生も出てくるかもしれませんね。そこをバラ

ばってしまうと、アウトプットを急がせることになります。小学校の先生はプロジェクトが得意ですし、子どもたちに発表させるのはよいのですが、英語嫌いをつくらないためにも、無理そうだったら違う選択肢を持っておく、などといったことを、継続して研修していきたいと思います。

畑田 教員研修をしっかりする必要がありますね。高学年ほどきちんと理解しない段階で不用意に言葉を発したくないという気持ちが強いので、アウトプットを急がせ過ぎないことをしっかりと伝えていかないといけません。子どもたちがコミュニケーションを楽しみ、自発的に発話できるよう育てるのが理想です。

兼重 教員研修については、中学校の先生も参加しやすい環境を整えることが必要だと思います。お互いの状況を知るために、お互いの授業を見るというのは大切です。『英語ノート』をどう使うかということも研修などでは話題になるとありますが、与えられた指導案でそのまま指導するのではなく、その学校の実態に合ったやり方に変える工夫をすると、子どもたちに合った指導ができると思います。

竹内 小中の独自性もあります。が、共通する部分については共通の研修が必要になってくるでしょうね。

また、モデルを提供されると、その真似をすることに終始して、

ンスよく、メリハリを大切に、というのはよくわかります。

自分の目の前の子どもたちに合った授業をしない先生も出てきてしまうので、自分で考える力をつける研修も必要だというご指摘をいただきました。

ちなみに、英語嫌いで入学してきた子どもたちがいたら、稲岡先生はどうされますか。

稲岡 まず、どんな子どもかという生徒理解に努めますね。何が好きなのかを探り、その子が興味を持つような題材やトピックをつかみ、それを授業で共有する場面を作って自信をつけさせていくと思っています。

また、小学校と同じ活動をする場合でも、場面設定や相手を替えるなど、学習形態を変えることで、マンネリ化は避けられます。これは、授業のやり方、教師の力量・工夫にも通じることですね。

竹内 これからは、中学校でも学び合いを意識した授業の展開が鍵になりそうですね。

次に、中学校の教科書は、どう変わるべきだと思いますか。

柏木 子どもたちが聞いてきているだろうと思われる Teacher Talk などの表現を教科書で引き継いでもらえたらと思います。また、英語そのもののリズムがあるもの、原作のよさが息づいているものを入れてほしいと思います。それから、他教科で行っている学習活動も参考にし合えたらと思います。

竹内 確かにグループワークなどが上手にできている学校は、全教

PROFILE



竹内 理

関西大学（外国語教育学研究科・外国語教育研究機構）教授。専門分野は、英語教育学（学習方略、学習者要因）と教育メディア学。2004年度大学英語教育学会学術賞受賞。著書に「より良い外国語学習法を求めて」（松柏社）、「達人」の英語学習法（草思社）ほか。

科でそういった学習活動を取り入れていますね。どんな活動を求められているのかが、生徒にもわかりやすいのでしょうか。

畑田 指導している立場としては、『英語ノート』で学んだチャンツなどがマニュアルに入っているとありがたいです。子どもたちに思い出させる工夫があれば、小学校での学びが活かせます。

また、月、季節、天気など、小学校でも触れている単語は、もっと早くに扱ってもよいと思います。

兼重 テキストは出版社の色が出るのでおもしろいですね。量が少なくないと、その分授業にオリジナリティを出す先生もいらっしゃいますが、出さないでそのまま使う先生もいらっしゃいます。マニュアルでどう示すか、発展的な活動をどう入れるか、外国語活動を活かすために最初の部分をどう工夫するか、またコンテンツをいかにふくらませるか、ということがポイントとなると思います。

また、平成24年度の新学習指導要領開始時の中学生には、小6でしか外国語活動を体験していない子どもたちもいる可能性があります。プレテキストをどうするかということも期待しています。

稲岡 自分の生徒に合わせて工夫ができる教科書だといえますね。また、友だちの発表を聞いて、英語で感想などを書いてみようとか、まとまりのある文章を書いて読んだ人とやりとりしようなどと、活動に目的を持たせることで、活動自体が変わっていくと思います。

竹内 発表で終わりではなく、それを通して何かをしようということ

ですね。

稲岡 はい。インタビューや発表をして終わりにするのではなく、誰かに聞かせるための発表をするんだということを、生徒たちに理解させたいと思います。中学生は生活の中で、苦しんだり悩んだりしています。人の意見も聞いてみたいし、求めています。自分の考えがおかしいのでは、と不安になったりもしています。大変ではありますが、教師も文型のチェックで終わらせるだけでなく、そういう生徒に応えていく必要があるでしょう。

本文トピックは、生徒たちが興味を持つようなもの、心を打たれるもの、乾いた心に水を与えるようなもの、また斬新なものもあるとよいと思います。

竹内 中学校の英語教育は、Language Teaching というより Language Education なのでしょうね。一人ひとりの子どもたちに向き合う可能性を残した教科書を作らないといけません。

それでは、最後に一言ずつお願いします。

柏木 デジタル教材も充実してきましたが、生きたコミュニケーション活動は先生にしかできません。教員養成や研修などで、これから英語教育を担っていく人材を育てていくことが重要だと思います。

また、「連携しよう」と意気込むと大変ですが、何か共通の目標に向かっていくうちに小中連携ができるのいい形なのではないかと思っています。

畑田 中学校の先生方に、小学校の外国語活動にも興味を持って

もらえるようにもっと発信していかなければならないし、また、中学校では小学校で得たものを活かして連携し、発展させることができるように工夫していかなければならないと思います。

稲岡 小中が9年間の目標をお互いに確認し合うためには、生徒を軸に学区単位で連携していけないといけないと思います。また、指導法の連携の面で、教科書や『英語ノート』の影響は大きくなると思うので、それを使う教師側もしっかりと考えていかなければいけないと思います。入門期をどう扱っていいかなどといったことも、同僚と確認し合い、小学校にも発信していきたいと思います。

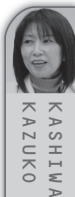
兼重 今は大きな変革の時期だと思うので、教員養成や研修の機会に、新しい情報、具体的な情報をたくさん提供し、先生方にもこれまでの経験をうまく活用・共有していただくことが、より効果的な英語教育に必要になると思います。

竹内 先生方は、一人ひとりがプロフェッショナルです。プロは新しいものにすぐにとびついたりせず、情報をしっかりと手に入れ、考えます。しかし、いったん腑に落ちたら、果敢に行動を起こすものです。今日の座談会のお話を通して、いろいろな情報を集めていかなければならないことを認識していただき、あとはプロの感覚を総動員してよく考えたのち、機敏に動いていただければ、きっと小中連携はうまくいくだろうと信じております。

今日はどうもありがとうございました。(2009年1月)



INAOKA
FUMIYO



KASHIWAGI
KAZUKO



KANESHIGE
NOBORU



HATADA
AYA



TAKEUCHI
OSAMU

協同学習を重視する授業 における指導案の書き方

松沢 伸二 Matsuzawa Shinji
(新潟大学)

1 はじめに

言葉は人と人とのコミュニケーションの手段であるから、外国語学習者は初期段階からペアやグループの形態で学ぶことが望ましい。また、多感な十代の学習者が助け合い、高め合って、共に学ぶ喜びを感じるとる意義は大きい。ペア・グループでの協力的な活動を最大限に活用するこうした指導は、協同学習 (cooperative learning) と呼ばれる。

新学習指導要領は「他者と協同して問題を解決しようとする学習活動」を、総合的な学習の時間に求めている。上述のように、協同学習は英語の授業にも必要である。今回は、「このように書くと、協同学習を重視する授業がより確実になる」という考えでまとめた指導案の書式を示した。以下にその意図と書き方を説明する。(なお、1. クラスの実態、2. 本時の位置づけ、3. 本時の目標は省略してある。)

2 活動ごとに学習形態を書く

英語の授業で実施される活動には、教師がクラス全体に向けて行う一斉活動 (whole-class activity)、生徒一人一人が取り組む個別活動 (individual activity)、生徒が隣や前後の級友と共に行うペア活動 (pair activity)、それに4人ほどの小集団で取り組むグループ活動 (group activity) などがある。

このうち協同学習が生じるのは、ペア活動とグループ活動である。指導過程で見ると、Warm-up や Review ではペア活動による協同学習がよく行われる。Presentation は教師が前面に出る一斉活動が中心だ。続く Practice ではペアによる協同学習がよく用いられる。文章レベルでまとまりのある意味の授受を行う Production のタスクでは、グループ活動による協同学習がその中核を形成する。

協同学習は1つの指導過程の一部の活動でのみ行われることもある。例えば Review で既習ページの音読をする時、「単語の発音に注意して、ペアで順番に読んだあと、もう一度全体で読む」という活動を計画することがある。この場合は、Review という1つの指導過程の前半にペア活動、後半に一斉活動が配置されている。

したがって指導案では、活動ごとに、一斉・個別・ペア・グループ活動のどれを行うかを、「d. 指導手順」の「学習形態」の欄に記述する。こうすることで、教師の意識が協同学習に向けられる。

3 協同学習の観点での評価を書く

多感な中学生を協同学習に導くのは容易でない。性差や性格、それに英語の得意・不得意など様々な要因が重なり、助け合い学習ができないペアはもとより、小集団学習に拒否反応を示すグループも出てくる。漫然とペア活動・グループ活動を計画するだけでは、共に学ぶ協同学習は生じない。

ペアやグループの編成では、英語学習が得意・平均的・苦手な生徒を適切に組み合わせる (small heterogeneous group)。「記録用のワークシート、ペンをグループに1つずつ用意する」などで、グループ内にプラスの相互依存を生じさせる (positive interdependence)。協同学習の成立にはこうした配慮が必要だ。これらは「留意点」に記述する。

次に教師が期待する協同学習の姿を、「グループで協力して質問し、必要な答えを集めることができたか」などと、「c. 生徒の学習の評価」の「協同学習の観点」に記述する。またそうした協同学習を導く教師の姿を、「机間指導により、語彙や表現方法等について支援を行っている」などと、「b. 教師の指導の評価」の「協同学習の観点」に書く。

(1. クラスの実態, 2. 本時の位置づけ, 3. 本時の目標, および指導過程2以降は省略してある。)

4. 本時の展開

指導過程 1 : (..... 分)

a. 本指導過程の目標 :

b. 教師の指導の評価 : [協同学習の観点]
[他の観点]

c. 生徒の学習の評価 : [協同学習の観点]
[他の観点]

d. 指導手順

教師の働きかけ	学習形態	生徒の応答／活動	留意点
.....			
.....			

e. 板書計画

.....

f. 配布ハンドアウト

.....

~~~~~

## 4 相互評価活動を書く

協同学習は相互評価 (peer assessment) を重視する。相互評価には、級友の学習を評価する行為を通して自分の学習にも責任を持たせ、自分の学習を評価する自己評価能力を育てる機能がある。相互評価にはこれに加えて、学習者がお互いにほめ合い、励まし合うことを通して、お互いの向上のために共に学ぶ人間関係を形成する働きがある。協同学習はこのプロセスを大切にします。

例えば Production の活動で、「中学生に携帯電話は必要かどうか」について、グループ対抗のディスカッションを行う場合、「賛成派・反対派のグループの議論を聞き、『意見のユニークさ』『発表の工夫』『グループの協調性』の3つの観点から拍手で評価する」といった相互評価活動を行う。この場合は、相互評価の実施方法を「d. 指導手順」の「教師の働きかけ」に書き、「学習形態」の欄に、「相互評価」とラベルをふって、活動内容を明示する。

## 5 おわりに

協同学習は、佐藤学氏の『学校の挑戦：学びの共同体を創る』(小学館, 2006) などの著作でよく知られている。協同学習を重視する英語教師は、英語が苦手な生徒や得意な生徒への効果はもとより、生徒の学ぶ意欲やクラスの雰囲気の変化に注目し、実践に自信を深めている。協同学習は Practice と Production を成功に導くという点で、新学習指導要領の言う「活用する力」の育成にも役立つ。

本連載では3回にわたって指導案の書き方を述べた。指導案の作成は授業の予行演習になる。自分のために目的別の詳しい指導案が書け、参観者があればその要点をまとめた指導案が書ける。これも英語教師の基礎力の1つである。(本稿の活動例は、『英語教育研究発表会要項』(2008) より引用した。本要項には新潟市立坂井輪中学校英語科が、「共に学ぶことを通して、個の力を伸ばす指導の工夫」をテーマに行った実践が収録されている。)



# 文法テストが測っている文法力再考

根岸 雅史 Negishi Masashi  
(東京外国語大学)

## 1. 文法テスト

おそらく英語のテストの作成において、「文法テスト」の作成に困っている教師はほとんどいないだろう。それは教師自身がこれまでにたくさんの文法問題を経験してきており、他の領域のテストに比べレパートリーもたくさんあるためだ。

その代表的なところは、空所補充問題や並べ換え問題であろう。これらは、それぞれ単語の形式や単語の並べ方に関する力を見ようとしている。たとえば、ある文脈で、ここは am/are/is のうちどれが適切かとか、they/their/them/theirs のうちどれが適切かなどを見るのが前者のテストで、ある文型の文が与えられた単語で作れるかとか、分詞による後置修飾のある名詞句が作れるかなどを見るのが後者のテストである。

中学校の教科書や授業は、基本的に文法シラバスによっている。その意味では、このような文法テストは意味があり、それぞれのテスト形式の役割を正しく認識して問題が作られていれば、ある程度の診断機能も果たすことになるだろう。

## 2. 文法力再考

しかし、本稿では、そもそも文法力とは何であろうか、従来の文法テストで測ってきた文法力とは何か、文法力を見るには他の方法はないのか、というやや根本的な問題意識から出発したい。

まず、文法力について考えてみよう。ここでは、文法の「知り方」を考えてみる。ある文法を頭でわかっているということと、それを実際に文脈の中で使えるということとは同じではない。3 単現の s や複数形の s などは、大学生になっても実際の運用で

はよく間違える。おそらく知識としては知っていることだが、なかなか使えるようにはならない項目である。文法規則を文法用語などを用いて説明できる知識は declarative knowledge (おかしな訳だが「宣言的知識」と訳されたりする)、使いこなせる知識は procedural knowledge (こちらは「手続き的知識」と訳される) と呼ばれる。

また、文法知識は、explicit knowledge (明示的知識) と implicit knowledge (暗示的知識) という分類もできる。典型的には、母語の文法知識などは implicit なもので、explicit ではない。ただ、外国語でも、誤文を見たときに、なぜだかわからないがおかしな気がすると思えるのは、この implicit knowledge のおかげである。

こうした枠組みで文法力を考えるならば、従来の文法テストは、declarative knowledge かつ explicit knowledge を主に見てきていたといえるだろう (もちろん中には、明確に説明はできなくても implicit knowledge でできてしまう問題もあり得る)。こう考えると、私たちが文法テストで見てきた文法力は、かなり限定的な知識だったのではないだろうか。

## 3. 4 技能を通しての文法力の測定

文法力はすべての技能に関わっている。聞いた、読んだりするときにも、書いたり、話したりするときにも、もちろん文法は関わっている。したがって、これら 4 技能の使用を通して、文法力を見ることができるようになるはずである。

ただ、聞いた、読んだりという受容技能においては、特定の文法項目に関するテストは作成しづらい。文レベルの理解に限定したとしても、ある文法項目



の理解だけを見ることは容易ではないからである。そもそも、3 単現の s のようにコミュニケーション上の情報量のほとんどないものもあるし (David plays football every day. という文では、s はわからなくても文の理解にはまったく支障がない)、受動態などであっても、それを含む文にはいくつもの内容語が含まれ、その内容語をつなげるだけで語の関係性がほぼ推測されてしまう場合が少なくない。たとえば、Sign A is seen in Australia. という文は確かに受動態の文であるが、この聞き取りにおいて、A の標識とオーストラリアを結びつけることは、受動態を理解していなくても可能である。

では、話したり書いたりという発表技能の場合はどうだろうか。自由に話したり書いたりさせれば、確かにおおよその文法力は見ることができるだろう。しかし、特定の文法事項の測定を考えると、こちらがねらった文法事項が使われるとは限らない。

また、どれだけリスクを冒すかという個人差の問題もある。少しくらい自信がなくても使ってみるというタイプの学習者と、かなりの自信がないと使わないというタイプの学習者がいるだろう。

日本のような英語学習環境では、おそらく declarative knowledge は procedural knowledge に先行するだろう。つまり、まず頭でわかってから使えるようになるということだ。さらに、意識的に使おうと思えば使えるようになってからも、自分から選択して使いこなすというような「自動化」したレベルに到達するには、さらに時間がかかるだろう。

#### 4. 新しい文法テストの提案

こうして考えてみると、従来の文法テストにおいて、ある文法項目ができたと判断されても、それは①その文法項目だけに着目して、じっくりと考えれば正解を得られるレベルなのか、②その文法項目を意識して使おうと思えば使えるレベルなのか、③その文法項目を特別意識しなくても使いこなせるレベルなのか、わからないのである。

もちろん①のレベルについては、従来の文法テストで見ることができるし、③レベルの能力の有無を見るのであれば、実際に話させたり、書かせたりす

ることになる。話させたり書かせたりしたときに、コンスタントに正しく使いこなせていれば、習得済みということが出来るだろう。しかしながら、中学の段階では、習った文法事項の多くは③のレベルまでなかなか行かないのが現状ではないか。

したがって、②のレベルの測定が、本来はもっと求められていだろう。ただ、これに関しては、テストはおろか指導の場面でも、ほとんど目が向けられてこなかったといえる。そこで、このレベルの能力をテストする方法を以下に提案する。イメージは、従来型の文法テストを口頭で行うというものである。たとえば、単なる並べ換え問題も、口頭で行うととたんに難易度は上がる。

us gives our teacher a lot of homework  
→ Our teacher gives us a lot of homework.

また、従来型の be 動詞の現在形のテストも口頭で行えば、まったく別の問題といってもいいだろう。

次のポーズに am/are/is のどれかを入れなさい。  
I ... from India → I'm from India.  
Koji ... from Osaka → Koji is from Osaka.

さらに現実の会話らしくすることも可能である（このような問題では、どのように答えるかを示す例題が必要かもしれない）。

相手の話しかけに、反対しなさい。  
You were sleeping during the English class.  
→ No, I wasn't.

これらの問題は、おそらく目で見て行うことはさほど困難ではないだろう。ただ、これを口頭でできるかどうかは、習得段階に応じてかなり差が出るのではないか。これらを口頭で行うとなると、対面で行うことになり、実用性が下がってしまう。もし対面での実施が難しいようであれば、音声で問題を流し、答えは書かせるというような筆記試験でも、ある程度先述の②のレベルに到達しているかどうかはわかるはずである。

# 「わかる」授業づくり を目指して(3)



## — 学習が役立つことを実感できる日々の表現活動 —

井上 志帆 Inoue Shiho (福岡県川崎町立池尻中学校)

### ① はじめに

前回まで、「わかる」授業づくりのために、日々の授業でできる工夫や、「読む力」をつけるための取り組みを紹介してきました。最終回となる今回は、今までの活動を踏まえて、英語学習が少しでも役に立つと生徒が実感できる表現活動について紹介しようと思います。

### ② 表現活動のねらいを明確にする

教科書の各課を学習することによって、実生活でも役に立つ力がつくという実感を持たせることができれば、生徒への英語学習の動機づけができ、やる気を持たせることができると思います。ただ、授業の中でそれを実感させることはなかなか難しいのが現実です。

そこで重要になるのは、何のためにその活動をするのかということを明確にした表現活動をさせることだと思います。NEW CROWNの教科書でいえば、USE IT や TRY に取り組むときに、その活動のねらいを示すと、生徒も何ができるようになるというイメージができると思います。

また、個々の活動や1時間の授業のねらいだけでなく、各課の学習に入るときに、「LESSON ○を学習して～できるようになろう(～しよう)」など、単元の目標(表現活動の目標)を明確に示すとういいます。

#### [各課の表現活動の例]

- |              |             |
|--------------|-------------|
| ・自己紹介        | ・第三者についての紹介 |
| ・Show & Tell | ・スキット作りと発表  |
| ・英語での意見交流    | ・英作文とスピーチ   |

表現活動を取り入れることは、限られた授業時数の中である程度の時間の確保をすることが必要になるので、それらを見通した授業計画の組み立てが必

要になります。

### ③ 話す活動

以前にも書いたことですが、教科書の本文にしる、重要文にしる、音読をすることは有効です。私が授業で感じるのは、しっかり声を出して音読できると、発音や耳が鍛えられるだけでなく、それによって生徒の気持ちも、前向きになってくるということです。

音読で英語を声に出すことに生徒が慣れてきたら、日々の授業の様々な場面で、声に出して自分のことを表現させると、学習した表現がより確実に身につく、英語を話すということの実感が持たせられると思います。次にその活動例を紹介します。

#### ① 既習事項を利用した Q&A

既習事項の復習と授業のウォームアップを兼ねて、授業の始めに教師対生徒のQ&Aを口頭で行っています。例えば、過去形や未来表現を使った次のような質問をし、生徒自身のことを答えさせます。

#### [質問内容の例]

- ・ Did you study after dinner last night?
- ・ What time did you get up this morning?
- ・ Will you watch TV tonight?
- ・ What will you do this weekend?

あくまでもウォームアップなので、3～5人の生徒に答えさせる程度の、短時間の活動とします。1回の授業で答える生徒は少ないのですが、指名する方法を工夫し、最終的には全員を指名するようにしているので、質問に答える機会は全員にあります。

授業の中で、生徒が既習事項を使って話す機会は、こちらで仕組みない限りあまりありません。この活動を行うことは、そういった既習の重要表現や単語の復習になるだけでなく、英文を自分の頭の中で構成する練習にもなります。さらに自分自身のことを答えるので、より現実的なやりとりができます。

|                             |                                         |
|-----------------------------|-----------------------------------------|
| はじめは、生徒は積極的に取り組まないかもしれませんが、 | matter?                                 |
| ないと思いましたが、実際はどの生徒も前向きに答     | Mike : ( ).                             |
| えようとしています。テストではないので、答えにつま   | Kumi : When did it start?               |
| ればこちらからヒントを出したりもしますが、生徒     | Mike : ( ).                             |
| 同士で助け船が出ることも多くあります。その点      | Kumi : I will go to the nursing room    |
| も、生徒が前向きになれる要素かもしれません。当     | with you.                               |
| てられた生徒のみでなく、他の生徒にとっても、こ     | Mike: Thank you. It's very kind of you. |
| の活動はよい復習になっているようです。         | Kumi: ( ).                              |

## ② スキット作り

前述のように、英語学習の動機づけとなる表現活動の1つに「スキット作り」があります。自分で、またはペアやグループで内容を考え、短い対話文を作って発表するというもので、これを効果的に利用できれば、授業での学習がいつか役に立つかもしれないという実感にもつながると思います。

スキットを作らせる方法としては、場面設定をしたり、いくつかの表現を使うことを条件として出したりする方法があると思います。例えば、「病院での医者と患者の対話を作る」や「will と must を使った文を必ず対話文の中に入れる」などです。

しかし、スキット作りに慣れていないと、一から対話文を作るのは難しく、時間もかかるので、最初はある程度こちらで対話文を作っておくといえます。その中に空欄をいくつか入れておいて、生徒に空欄に入れる言葉を考えさせ、対話文を完成させるのです。慣れてきたら、生徒が考えて作る部分を増やしていくといえます。作成したスキットはみんなの前で、暗記をして発表します。時間的な制約もあるので、全員を発表させることを考えて、対話文はあまり長くないものでよいと考えます。

[対話文の例(空欄に入る言葉を考えさせる)]

例① At school

Ken : What will you do this weekend?

Emma : I will ( ).

Ken : Sounds interesting.

Emma : How about you? What will you do this weekend?

Ken : I will ( ). I must ( ).

Emma : Oh, I'm sorry to hear that.

例② At school

Kumi : You don't look well. What's the

## ③ 英語での意見交流

「あるテーマを与えて、それに対する自分の意見を英語で述べる」ということも、話す活動としてできるとよい表現活動のひとつです。これを ALT との授業で行うと、ALT との意見交流にもなり、おもしろいのではないかと思います。テーマは、最近のニュースの話題から取り上げるのもよいと思いますが、なかなか難しいので、賛成か反対かの立場、または二者択一するような内容で意見が述べられるものを取り上げると、自分の考えを言いやすくなるのではないかと思います。

[テーマの例]

・ 映画を映画館で観るか、DVD で観るか

・ 「ハゲワシと少女」の写真をケビン・カーターは撮るべきだったか否か (NEW CROWN 3 より)

・ 中学生が携帯電話を持つことに賛成か反対か

より活動を発展的にするには、自分の意見を一方的に述べることにとどまらず、反対の立場の人に質問したり、ディベートまでできたりすると、よりおもしろくなっていくかもしれません。これを実行するには、自分の意見の言いやすさや、相手の意見をきちんと聞き取ることを考えて、少人数の授業で行う方がいいのではないかと思います。

英語を学習することが役に立つということは、自分が発した英語を通して、自分自身の考えを相手(特に外国の人)に伝えることができたときに強く実感できると思います。

## ④ 書く活動(英作文)

現在、3年生で英作文の練習を行っていますが、生徒は英作文が苦手だということを改めて感じます。ただ、それを克服するには、最初はとにかく間違っ

|                                                                                                                                                                             |                                                                                                                                                                                |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| てもいいからたくさん文を書くことだと思うので、生徒にも常にそれを伝えながら、英作文に取り組ませています。                                                                                                                        | ・ Have you ever been to a foreign country?                                                                                                                                     |
| 高校入試にも英作文は出題されることが多いので、特に3年生は英作文の力をつけることが必須です。1学期から2学期にかけては、各課の重要表現を小テストをしながら覚えさせ、教科書を学習し終えた3学期は、入試に向けた英作文に取り組んでいます。長文読解やリスニング、既習文法の復習など他の学習内容もあるので、毎時間の授業で英作文をするわけにはいきません。 | ・ What do you want to be in the future?                                                                                                                                        |
| そこで、英作文のテーマをいくつかまとめて生徒に提示し、授業で一斉に英作文に取り組む以外に、個人で自主的に取り組めるようにします。学級には英作文の用紙を袋に入れて常備し、いつでも生徒が取ることができるようにしておきます。次のような手順で英作文に取り組めます。                                            | ・ Is it difficult for you to live without your own cell phone?                                                                                                                 |
| ① テーマにそって英作文をする                                                                                                                                                             | [生徒の英作文の例]                                                                                                                                                                     |
| ② 教師に提出して添削を受ける                                                                                                                                                             | 例① “Which season do you like the best?”                                                                                                                                        |
| ③ 添削を参考に英文を書き直す<br>(※ OK が出るまで繰り返す)                                                                                                                                         | I like fall the best. Fall is not too hot and not too cold. So fall is very comfortable. We have a lot of delicious food in the fall. We can see beautiful leaves, too. (35 語) |
| ④ 清書をして提出する                                                                                                                                                                 | 例② “Do you like reading books?”                                                                                                                                                |
| ⑤ 次のテーマの課題に取り組む                                                                                                                                                             | Yes, I do. I often read books when I am free. I learn a lot of things from books. So I sometimes go to the library with my friends. We enjoy reading books there. (34 語)       |

## 5. おわりに

|                                                                                                                                                                                   |                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| このように、1つのテーマの英作文を完成させ、次のテーマの課題に取り組むという方法をとっています。英作文をするときの条件として、文の数はいくつでもよいが、30語以上使うようにと伝えています。また、あらかじめ英作文をするときの参考表現を、プリントにまとめ、なかなか自分一人で英文が書けない生徒の助けになるようにしています。                   | 生徒に英語の様々な力をつけさせるために、全国の先生方が日々、試行錯誤をされていると思います。私もその一人で、今後も教師である間は、ずっとそうありたいと思っています。私はよいと思われることは、できるところからどんどん取り入れていきたいと思っていますが、そうするだけでは、指導が行きあたりばったりになってしまいます。そうならないように、3年間を見通した計画を持つことが必要です。結果はすぐに出ないことが多いので、あれこれ試してみても継続性に欠けることになってしまいますが、継続性がないと効果は出てこないもので、柔軟性を持ちながらも系統だった継続性のある指導内容を確立させることが必要だと感じています。 |
| 実際には、英作文をする作業は、最初はなかなか進みません。しかし、英語が得意な生徒が徐々に積極的に取り組み始めます。なかには課題として出されたテーマを全部書き終えて、同じテーマで再度内容を変えて書く生徒もいます。そんな姿勢に刺激を受けて英作文に取り組む生徒が他にも出てきます。少しでも多くの生徒が前向きに英作文に取り組めるようにしていきたいと思っています。 | また、今後は小学校に英語が必修になることによって新たな課題も出てくると思います。中学校入学の時点で英語に対してプラスイメージを持っている生徒がいる一方、マイナスイメージを持っている生徒が出てくることも考えられます。それにどう対処していくかで頭を痛めることになるかもしれませんが、一人で悩むのではなく、日頃からの他の教師との意見交流や情報交換を行うことが大切だと思います。                                                                                                                  |
| [英作文の課題の(一部)]                                                                                                                                                                     |                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| ・ Which season do you like the best?                                                                                                                                              |                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| ・ Do you like reading books?                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |



# 小学校英語 Just Now

★本コラム中のご所属・拠点校等は、平成21年1月のものです。

## I 米百俵で育まれた子どもたちと教師は、今

We are Nagaoka's future. 阪之上小学校では恒例の「英語劇『米百俵』\*」の最後に6年生全員が誇らしく叫んだ。ALTにこの出来事を伝えるための英語劇である。子どもたちの「伝えよう」とする熱意が痛いくらいに伝わってくる。同校の高橋幸雄校長は、終わりのあいさつで、「米百俵の精神として一般に知られていることに合わせて『自分を大切にし、他も大切にすることです』と述べた。

拠点校となった新組小学校は、『英語ノート（試作版）』（文部科学省）をベースに、教育委員会と同校がいままで積み上げてきた教材や指導法を融合させている。同校の研究発表会では『英語ノート』を活用する教師の姿が印象的で、子どもたちは「伝えることができた喜び」で笑顔にあふれていた。

拠点校でなく、『英語ノート』等が配布されていない寺泊小学校は、寺泊中学校と大河津小学校とともに研究授業を行った。そこでは教師と子どもとの間に温かいものを感じた。また関原小学校は、夏休み中に「英語嫌いをつくらないで中学校に子どもを送る」ことをテーマにし、「まずは教師が大きな声で英語を口にする」という研修を行った。

そして中学生には、市国際交流協会主催の2つの海外派遣と、4日間、6～7名でネイティブスピーカーと1日中英語に浸ることのできる「イングリッシュアカデミー」を用意している。今年度は約120名の生徒がこれらの3事業に参加した（3年間通して、20人に1人以上もの生徒が希望により参加）。

『米百俵』の精神は、現在「熱中・感動・夢づくり教育」事業として、外国語関係だけでなく61事業が用意され、営々と引き継がれている。「教師が熱中や感動し

## 米百俵のまちの外国語活動

杉山 敏 Sugiyama Satoshi  
(新潟県長岡市教育委員会)

なければ、子どもが前を向いて何かをやろうとしないのではないか」という、加藤孝博教育長の指導は象徴的である。

## II 英語指導室という組織

教育委員会の学校教育課には英語指導室という組織がある。平成4年にALTを1名採用した。平成6年には英語指導員（日本人）を採用し、平成7年には小学校英語活動を始めた。ALTと英語指導員の小学校へのペア派遣を「長岡方式」と呼んでいる。平成9年には5ペアとなった。現在は13名のALTと9名の英語指導員がいる。小学校には（平成20年11月の免許法改正により今後の動きは不明だが）基本的には英語教師はいないので、英語指導員は、ALTを育て、小学校教師とALTとの間に入り、英語活動を円滑に進めることが主な職務となる。また、英語活動実践の手引の作成や小学校教師の研修の補助にもあたっている。

先人には先見の明があった。ALTの数をひたすら増やすのではなく英語指導員を合わせて増やしていったことが見事に功を奏し、小学校外国語活動の必修化が決まっても何の揺らぎもない。『英語ノート』等が現場にどさっと来たときに、現場は一時的に混乱しても、それは時間の問題で、市内の小学校教師はすぐに自分たちのものにしていくはずであろう。

平成9年の時点で、すでに「小学校の英語活動は、語彙や表現を教え込むものではなく、楽しい活動を通して児童の英語への興味・関心を高めるものである。英語という言葉を通して、人と人とが出会い、かわりを深めていくことが大切である」という基本方針が提言されている。低・中学年で英語活動がやりにくくなったことを除けば、長岡市では10年以上前から、新学習指導要領の小学校外国語活動のねらいはクリアできている。学級担任と英語指導室の事前の連携

があり、実際の授業で、学級担任・ALT・英語指導員がいる手厚い指導によって、子どもたちのコミュニケーション能力の素地を自然に身に付けてきた。

### Ⅲ 長岡の火を守ろう

平成20年4月、文部科学省の指示で、1～4年生の英語活動がやりにくくなった。教育委員会事務局は、「長岡市はどう受け止めるのか。市として時数の目安をどのように示すか」という検討に入った。南雲茂小学校長会会長（表町小学校長）をはじめ市内の校長と慎重に打ち合わせしながら、検討を進める中で多くの校長から励ましの言葉をいただいた。

その後、英語活動において実績のある京都市や横浜市など、多くの教育委員会に電話をし、1～4年生への対応を伺い、ご多用の中、熱いメッセージをいただいた。そして、いただいた情報を元に徹底的に討議し、1つの結論に至るまで3ヶ月要した。

結果として、横浜市のケースを参考に、当市のいままでの積み上げを継続していくことにし、現在その詰めに向かっている。その基本姿勢は「長岡の火を守ろう」すなわち「いままでの積み上げを大切に、学習指導要領に従って、長岡の英語活動を守り続けよう」という教育長・教育部長・教委事務局・小学校長会がともに持つものである。

これを具現化していくのは容易なことではない。それを支えてくれるのが、学級担任から毎時間届けられる「英語活動振り返り」である。「全員が活躍できる活動だったので、どの子も目を輝かせていました。ALTと英語指導員の表情豊かなコミュニケーションに子どもたちはグッと心をひきつけられていました」という声が届いている。この振り返りは英語指導室が義務付けているもので、不評かと思いきやこれだけ評判がよいと、決して「火を消してはいけないのだ」と、思いを新たにす。

### Ⅳ 結局、課題は小中の連携

このコーナー「Just Now」で多くの先生方が述べてこられたように中学校教師の意識改革が急がれる。

#### (1) 中学校への情報提供

まずは草の根でいく。英語教師と話す機会があれば、次のように言い続けている。「大変なことになります。小学校で70時間、つまり中学校の今のカリキュラムであれば1年生の10月頃まで、要するに一番のハネムーン期間が小学校に行きます。前倒しではないにしても先生ならどうします？ 私なら、話す・聞くコミュニケーションはもちろん、書く・読むコミュニケーションに向けての活動がもっと面白くて、楽しくて、知的好奇心を刺激するものになるよう工夫します。早ければ、平成22年度には、いままでと違う中学1年生が現れます」。

また、先に述べた拠点校での研究授業へは中学校教師最低1名の参加を義務付ける通知を出した。ALTも英語指導員も全員参加して、グループで授業をもとに討議をした。小学校外国語活動のねらいを多くの中学校の教師が理解していない実態が明らかになった。後日談として、小学校から「上から見下されているようで不快だった」と感想が寄せられた。

#### (2) 中学校英語教育研修の見直し

- ① 研修の回数を増やす。小学校でも2年間で30時間を行うわけだから、中学校もいままで通りという訳にはいかない。「研修の仕方」を指導していく必要もある。
- ② 小中担当者意見交換会を市教委主催で開催する。中学校区でも行われるが、全市的な視野から小学校と中学校の教師が「言いたいことを言う」機会を設け、現場で納得のいく方向性を見つけていく。
- ③ 『英語ノート』を受けて、言語活動を見直す研修講座の回数を増やす。中学校の言語活動がさらに知的好奇心を向上させるものにする。もうゲームは小学校でたっぷりやってくる。

生徒指導等で踏ん張る現場の状況は十分に理解している。学習指導要領が変わって「英語がますます楽しくなった。他とかかわる力がついた」などと小学校でも中学校でも、子どもも教師も言えるように『米百俵』の精神で職務に当たってきたい。

\* 戊辰戦争（1868-1869）で敗れた長岡藩は財政が窮乏し、三根山藩から百俵の米が贈られた。しかし藩の大参事小林虎三郎は藩士に分け与えず、「百俵の米も、食えばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」と諭し、売却金で学校を設立した。

# Japan's Best National Export: Entrance Ceremonies

**Robin Sakamoto**

(Rikkyo University)

## A New Look for April

Growing up in the state of Michigan, we often said “April showers bring May flowers.” This was because it always seemed to rain a lot in April before spring finally arrived in May. So for me, April always was a grey, gloomy time of year that I hoped would soon be over. My image of April has changed drastically since living in Japan thanks to two major events that happen at that time: cherry blossom season and school entrance ceremonies.

Although Japan is well known for cherry blossoms, they still take my breath away every year. My favorite spring pastime is to walk under the trees at night eating ‘*Ikkyu-dango*’. Cherry blossoms bring with them the potential of starting something new and as one feels the fresh spring breeze rippling through the trees and cascading those beautiful petals to and fro, it is easy to feel that anything is possible.

However, the April event that I find far more meaningful is the junior high school entrance ceremony. I cannot even remember my first day of junior high school. Of course there was an orientation but that was just to look around the school and to drop off school supplies. The first day of school started without any special welcome and hence I have no memory of it.

But in Japan what an event the first day of school is! Although each school is different, I am sure many of the elements of that special day are the same no matter which junior high school you attend. So I would like to share with you my impression of the first day of school in Japan as seen through my blue-green eyes.

## Speeches, *Sempai* and *Ouendan*

At the junior high school I know best, the *taiko* club stands outside the school drumming as the first year students approach the

building. The remaining 2nd and 3rd year students are busy rehearsing for the ceremony in the gymnasium. There is a feeling of excitement in the air until five minutes before 1 o'clock, when with all the parents and students eagerly awaiting the start of the ceremony, the order for silence is given. Not another sound is heard until the vice-principal announces the beginning of the ceremony.

The doors to the gymnasium are opened and in march the first year students. Many have uniforms that look far too big and the boys' new haircuts look far too short. As they make the long walk to their seats, it is easy to envision that until just a few weeks ago, they were elementary school students.

I have often tried to imagine what it must feel like to be one of those students. I suppose I would be scared to death wondering if I would fit in, make friends, and yet excited about my new junior high school life. I would probably be too nervous to truly hear the words of encouragement from the principal and other speakers. And just as I was thinking junior high was exactly the same as elementary school, I would be introduced to my *sempai*.

At our junior high school, each grade sings to welcome the first year students and then the *ouendan* take the stage. They lead the school in cheers to welcome the first year students who are now looking more relaxed and enjoying the ‘show’. There is a spirit of welcome that if I were a first year would make me want to do my best in my new school life.

As the first year students turn to leave the gymnasium, they no longer look the same as when they entered. There is a sparkle in their eyes and the bloom of potential to grow and be nurtured in this new environment of caring *sempai* and teachers. I truly wish that students all over the world could just once experience April in Japan as I have.

# 英語教師の リソース

RESOURCES FOR  
ENGLISH TEACHERS

## 基本文や語彙を 文脈の中で理解できる チャンツ

宮下 智恵美 Miyashita Chiemi  
(長野県松本市山形村朝日村中学校組合立鉢盛中学校)

英語らしいリズムで基本文を楽しく覚えられよう、授業でよくチャンツを活用しています。筆者が愛用しているのは『実践家からの児童英語教育法』（中本幹子著 アプリコット社刊 全3巻一解説編・実践編AB・実践編CD）です。この本はそのタイトルからも児童向けに書かれたものと思われそうですが、教科書に出てきた文型や語彙を中学生が覚えるためにも大変効果的です。その一番の魅力は、基本文の意味やそれが使われる場面を文脈を通して即座に理解できる点です。日常生活によくある場面を題材に、楽しい挿絵と軽快なリズムで英文が示され、聞いているだけで状況をイメージできます。

例えば次のチャンツ（実践編 CD, p.51）は have to の口頭練習としてはもちろん、基本文の導入に位置づけ、have to の意味を推測させる活動や、応用練習として教科書とは違った場面での have to の使い方を知る活動にも利用できます。

### Turn off the TV

Turn off the TV. Turn off the TV.  
You have to do your homework now.  
Right now? ×× Yes, right now!  
(中略)

Turn off the TV. Turn off the TV.  
You have to go to bed now.  
Right now? ×× Yes, right now!

また、このチャンツは have to のような 1 つの文法項目に焦点を当て、その英文を単独で扱うのではなく、親子の会話の中で have to が使われているので、関連した前後の慣用表現も同時に学ぶことができます。



『実践家からの児童英語教育法』全3巻  
解説編・実践編 AB・実践編 CD  
(2003© 中本幹子著 アプリコット社刊)

次のチャンツ（実践編 CD, p.55）では対義語をはじめ関連語彙が数多く示されているので、生徒の語彙力の向上に有効と思われます。筆者は聞こえてきた英文内容順に該当する絵を選ばせるなど、聞き取りとしても活用しています。軽快な繰り返しとユーモアある挿絵が助けとなり、one の用法を理解できるだけでなく、教科書に出てこない形容詞の発音や意味に、無理なく親しむことができます。

### Which Dog is Yours?

Which dog is yours?  
The little one? The big one?  
The ugly one or the pretty one?  
Bow, wow, wow.  
(以下略)

こうしてチャンツで練習したあとに表現活動を位置づけると、インタビュー活動など、話す場面ではリズムや語順に耳慣れているせいか、英語が苦手な生徒でも比較的スムーズに基本文を使うことができます。また、書く活動では、以前チャンツに出てきた単語や表現も活用して英文を書く姿が見られ、教科書で学習した語彙に加え、生徒の表現力の広がりを感じます。

最後になりましたが、この本のチャンツが文型や語彙だけでなく、異文化理解、他者理解的な視点からも内容が構成されているのも素晴らしい点です。女性消防士、盲導犬を扱ったチャンツ等、英語を通して生徒が気づき、ともに考える場となります。

『実践家からの児童英語教育法』は、筆者のおすすめの教材です。是非お試し下さい。



## 英語教育の明日をつくる ILEC セミナーのお知らせ

## 2009 夏季英語教育セミナー



日 時：2009 年 7 月 31 日（金）10:00 ～ 16:00

会 場：中野サンプラザ（東京都中野区）

URL <http://www.sunplaza.jp/>

（アクセス：JR 中央線・総武線／東京メトロ東西線「中野」駅北口より徒歩 1 分）

主 催：NPO 法人 ILEC 言語教育文化研究所

協 賛：株式会社 三省堂

対 象：中学校英語教師、小学校外国語活動・中学校英語に関心をお持ちの方

定 員：120 名

参加費：4,000 円

内 容：《講演・ワークショップ》

I 「英語基礎語彙力のあり方と辞書を活用した効果的な語彙指導」  
投野 由紀夫（とうの ゆきお）[東京外国語大学]

II 「『英語ノート』から探る小学校外国語活動」  
酒井 英樹（さかい ひでき）[信州大学]

III 「4 技能を統合させた英語指導の展開」  
安原 美代（やすはら みよ）[東京都三鷹市立第三中学校]

IV 「英語教育、これからどうなる —変わる指導、変わらぬ指導」  
吉田 研作（よしだ けんさく）[上智大学]

※参加される方全員に同じプログラムを受講していただきます。

※タイトル・内容は一部変更することもあります。予めご了承ください。

## 昨年度セミナーの参加者の感想

- ・「ことば」としての英語教育の大切な視点に気付かせていただきました。また、教師自身が外国語学習方略のモデルを生徒に示すことが大切であると再認識いたしました。
- ・音読だけで終わってしまっていた活動に、さらに変化をつけ、定着強化に役立つ方法を教えていただき、大変参考になりました。
- ・生徒をいかにのせていくかという、1つの方法を示していただきました。自分の授業計画にもっと戦略をもたせないといけないと感じました。
- ・生徒が笑う授業を常に考えています。ヒントになりました。

## セミナーのお申し込み・お問い合わせ

NPO 法人 ILEC 言語教育文化研究所

〒101-0061 東京都千代田区三崎町 2-22-14

TEL 03-3230-9473

URL <http://www.ilec.jp/>

※詳細はホームページで順次ご案内する予定です。

TEACHING  
ENGLISH  
NOW

15 号

2009 年  
4 月 1 日発行  
定価 80 円  
(本体 76 円)

編集・発行人：八幡統厚

発行所：株式会社三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14

電話 (03) 3230-9422 (編集)

振替 東京 00160-5-54300

[NEW CROWN ホームページ]

<http://tb.sanseido.co.jp/newcrown/index.html>

印刷：三省堂印刷株式会社

〒192-0032 東京都八王子市石川町 2951-9

電話 (0426) 45-6111 (代)

## 編集後記

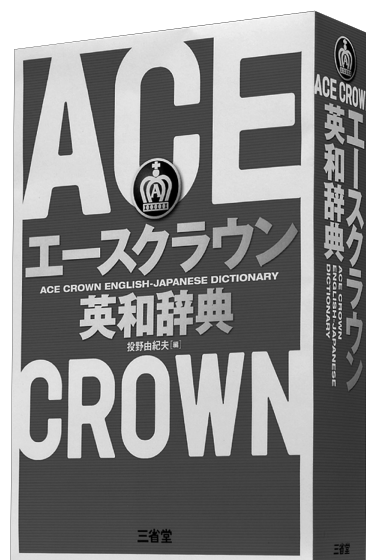
三省堂は、Web「三省堂英語 教科書・教材 SANSEIDO ENGLISH」(URL <http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/index.html>) にて、今後も、授業をサポートする資料（年間指導計画表、ワークシートなど）や英語教育に関する情報（コラム、研究会情報など）を掲載していきます。

基礎からやり直す、英語を楽しむ。  
学習英和のエース, 新登場!

# エースクラウン

ACE CROWN ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY

## 英和辞典



投野由紀夫 [編]

定価: 2,835円

総頁: 1,888頁(巻頭カラー96頁を含む)

判型: B6変型判

収録項目数: 英和 約50,000, 和英 約23,000

カナ発音付き, 2色刷

巻頭カラー  
96ページ!

中学の復習ができる  
「学習ページ」

コーパスを駆使!

最重要語を  
徹底解説する  
「フォーカスページ」

和英総項目  
2万3千!

類書中最大の  
「和英小辞典」  
付き

語法・受験に強い!  
現代英語に強い!

# WISDOM

しかも, 進化するウェブ辞書が無料で使える!

ウェブ版英和は全見出し語にネイティブの音声付き。また, 英和・和英ともに,  
教材作成・英作文に便利な新ツール「用例コーパス」を装備(一般公開中)。  
詳しくは, <http://www.dual-d.net/> へ。

ウィズダム英和辞典 第2版

井上永幸・赤野一郎 [編]

[並装] 3,465円(税込)

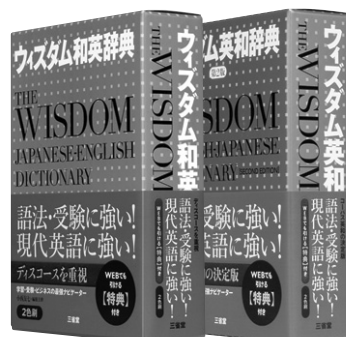
[革装] 5,250円(税込)

ウィズダム和英辞典

小西友七 [編修主幹]

[並装] 3,465円(税込)

[革装] 5,460円(税込)



# 小学校英語で身につく コミュニケーション能力

Communication Abilities Developed through  
Japanese Elementary School English Education

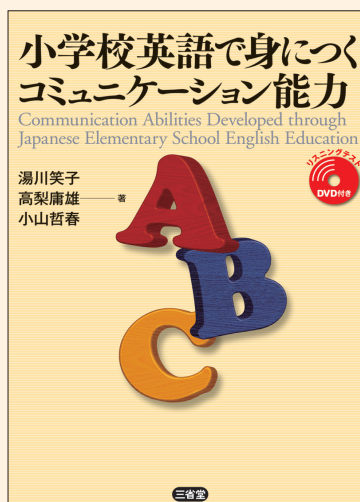
湯川笑子・高梨庸雄・小山哲春 [著]

2,625 円 (税込) A5 判 212 ページ ISBN 978-4-385-36401-8

小学校英語で児童が身につけた「コミュニケーション能力」とは？ 外国語活動が必修化された今、児童・教師を対象にした調査を通してこれまでの成果を検証し、今後の展開の可能性を探る。リスニングテスト DVD 付き。

## ■目次

- 第1章 小学校英語と評価
- 第2章 小学校英語の到達目標
- 第3章 YTK リスニングテスト（「英語ちからだめし」）の構築と内容
- 第4章 YTK リスニングテストの結果
- 第5章 YTK スピーキングテスト（「Let's talk」）の構築と内容
- 第6章 YTK スピーキングテストの結果
- 第7章 評価を生かした小学校英語と中学校との連携



# 教授のおいしい英会話 — アメリカ編 —

霜崎實／ジョージ・ドウ [共著]

1,890 円 (税込) 四六変型判 192 ページ  
ISBN 978-4-385-36413-1

NHKラジオ講座「英会話入門」の3ヶ月間のコースを  
速習2週間！で学べるようにコンパクトにまとめた英会話  
独習書。付属のCDを使った反復練習で、英語表現の  
コツと英語のリズムを体得。音声CD2枚付き。



## 三省堂

<http://www.sanseido.co.jp/>

□本 社

- 大阪支社
- 名古屋支社
- 九州支社
- 札幌営業所

〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14 TEL. 03 (3230) 9411 (編集案内)・9551 (営業)  
TEL. 03 (3230) 9422 (英語教科書編集部)

〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地 2-5-3

〒460-0008 名古屋市中区栄 3-25-43 瑞穂ビル 4F

〒810-0012 福岡市中央区白金 1-3-1

〒060-0042 札幌市中央区大通西 15-2-1 ラスコム 15 ビル 2F

TEL. 06 (6341) 2177

TEL. 052 (252) 9211・9212

TEL. 092 (531) 1531・1532

TEL. 011 (616) 8722